「満洲国」の大本教
―その実態と理念―

玉置文弥（東京工業大学大学院）

本報告は、昭和戦前期、国内外で活発な宗教・政治運動を展開した大本教が、1932 年に「建国」された「満洲国」においてどのような活動を展開したのかを、主に教団資料から明らかにしつつ、同時にそこで説かれた理念を考察するものである。

大本教は、1892 年に出口なおが神がかりになって開かれたとされ、後継者の出口王仁三郎により国内外で発展した新宗教団体である。王仁三郎は大正期の第一次大本事件を経て、全ての宗教の根は一つとする「宗教統一」思想を全面に押していく過程で、東アジアでの活動を重視していった。それを可能としたのが、中国の宗教・慈善団体道院・世界紅卍字会との連合運動である。道院とは 1921 年中国で発足した宗教・慈善団体であり、世界紅卍字会は教義に基づく実践機関として設置され国内外で災害救援などを行った。報告者はこれまで、この運動の実態を両教団機関紙誌や日中の公文書などの史料から実証的に解明しつつ、それを近現代日中のアジア主義・超国家主義の思想的系譜に位置付ける研究を行ってきた。そこでは主に連合運動が、「宗教統一」思想による諸宗教の集合を目指しつつ、親日的な旧北京政府関係者や関東軍など日中の政治的有力者らとも繋がりを有し、結果的に日本の政略的アジア主義としての「満蒙独立」を標榜する宗教的政治運動へと展開したことを明らかにしてきた。

他方で、1931 年の満洲事変から翌 1932 年の「満洲国建国」、そしてその後 1935 年の第二次大本事件まで続いた同地における大本教、そしてその実践団体人類愛善会の活動の実態は、これまでの研究では案外明らかになっていない。大本教は、道院・世界紅卍字会との連合運動を軸として「満洲国」全域に支部を設立し、「満洲国承認」を訴えるデモなどの政治運動を行う一方で、災害救援・貧民救済などの慈善活動を半ば公的機関として行ったが、このうち前者の政治運動に関しては、関東軍や旧奉天軍閥、黒龍会内田良平との関わりなど、政治的有力者の「建国運動」の動きがそれなりに注目されており、成果が蓄積されてきた［孫江 2016・佐々2020］。しかしその一方で、主に資料的制約からいわゆる一般信者レベルの動きについては詳細に論じたものはなく、概括的に触れられる程度で、どのような社会階層や職業の者が参加していたかなどその実態には不明な点が多い。さらに、そこで共有されていた「満洲国」をめぐる理念についても、これまで王仁三郎の「満洲国建国こそ理想世界への第一歩」という言説が強調されてきたが、それと一般信者の認識の間には、様々なバリエーションがあった可能性もあり、さらなる検討が必要であろう。

したがって本報告では、主に戦前期の大本教団における事務資料や機関紙誌など膨大な史料群を使用して、その課題に切り込む。その際、①活動内容、②一般信者の社会階層・職業・参加目的、③②の地域的特性、④「満洲国」政府の政策における大本教―道院・世界紅卍字会の位置づけを具体的な問題意識として論ずる。これにより、「満洲国」における大本教の存在の全貌を明らかにすることができると考える。

そしてそのことは、当時日本の諸宗教が行った「満洲国」における活動との共通性と差異を明らかにすることにもつながる。これまでは、主に仏教各派や教派神道、キリスト教の活動（「満蒙開拓」との関わりなど）が論じられてきた日本の植民地宗教研究だが、そこに大本教を比較的観点から位置付けることでその特異性を浮き彫りにしつつ、それによって反対に植民地宗教の全体像に迫ることを目指す。

参考文献

孫江「救贖宗教的困境―「滿洲國」統治下的紅卍字會」『孫江自選集作為他者的宗教―近代中國的政治宗教』博揚文化、2016 年。

佐々充昭「満洲事変における大本教の宣教活動―道院・紅卍字会との提携を中心に」『立命館文学』673 号、立命館文学会、2021 年。